明治期学校創立者の使用語彙と建学の精神・校訓
―森村市左衛門の場合―

斎　藤　達　哉

１．はじめに

１．１．本稿の目的

本稿の目的は、日本語学が他分野に応用可能な学問であることを紹介することである。日本語学では、近年、コーパス日本語学が急速に進展し、信頼できる言語分析ツールがweb上で簡単に利用できるようになっている。そこで、日本語学の専門知識を持たない人であっても、そうしたツールを利用しながら手軽に語彙調査ができることを紹介する。

応用されるフィールドとして想定したのは、学校教育の現場である。建学の精神や校訓について理解を深める際や、創立者についての学習を発展させる際に役立てられる可能性を考え、語彙調査の過程を紹介する。

調査の事例としては、明治期に活躍した実業家・森村市左衛門（1839-1919）の使用語彙と、彼が創立した森村学園の建学の精神や校訓の語彙との比較を紹介する。

森村学園（中等部・高等部国際交流・多言語教育センター）は、専修大学（国際コミュニケーション学部日本語学科）と連携について2022年８月１日付けで覚書を取り交わした。

この調査から、同校の校訓に用いられている語には、《創立者が高頻度で用いていた語をそのまま使用した場合》と《学校教育にふさわしい語を選んだ場合》との２種があることを推測した。

なお、本稿で紹介する語彙調査の手法は、日本語学の専門知識をもたない人であっても手軽に再現可能なことに重点を置いた。そのため、データ処理の段階で厳密性を犠牲にした点があることをあらかじめお断りしておく。

１．２．建学の精神・校訓との関連

私立学校にとっての建学の精神や校訓は、他校との差別化を明示したものであり、存在意義そのものでもある。

町田（2003）は、建学の精神の構文分析によって、私立学校が二つのタイプに分類できることを指摘する。

> 私立学校には、創立の原点を問い直し、その原点に立ち戻ることが求められるタイプと、時代性・地域性に即して、常にあたらしくより良いものを模索することが求められるタイプがあるのである。（p.46）

実業家・森村市左衛門が、晩年に創立した森村学園の建学の精神は「独立自営」、校訓は「正直、親切、勤勉」となっている。

森村市左衛門胸像と校訓（森村学園）

森村学園の場合は、前者のタイプに該当する。同校が推進している「未来指向型教育」導入時の中等部・高等部校長を務めた江川昭夫氏は「建学の精神、校訓に立ち戻り、困難を乗り越える術とし、ポストコロナ禍における新たな学びの在り方を構築すべし[1]」と記している。

---

[1] 江川（2021）による。

建学の精神や校訓に立ち戻った教育が求められるなか、創立者が高頻度で用いていた語との関係を知っておくことは、建学の精神や校訓の制定の背景について考えを深める契機となろう。

１．３.「学校の創立者についての学習」との関連

私立学校では、建学の精神や校訓に立ち戻るとともに新たに現代的な解釈を与えることや、創立者の業績について学ぶことを通して現代に通じる哲学を見いだすことは、決して珍しいことではない。

例えば、専修大学が、建学の精神である「社会に対する報恩奉仕」を現代的に捉え直して、「社会知性（Socio-Intelligence）の開発」を21世紀ビジョンとして据えたこと[2]も、前者の例といえる。

また、本稿で取り上げる森村学園は、教育活動の中で創立者・森村市左衛門研究を行なっている。同校のwebページ[3]によると、中等部１年生の２学期に生徒のアイデンティティを確立させることを目的とした「創立者・森村市左衛門研究」を実施したことが紹介されている。同webページの総括の中で、

> 校訓「正直・親切・勤勉」は、市左衛門の人生訓でありました。市左衛門の仕事に対する向き合い方、考え方は、単にその枠に収まらず「人はいかにして生きるべきか」という哲学に通じています。その一端が今回の活動で少し分かってもらえたかと思います。

と述べられていることは、後者の例といえる。

元教諭の花村哲男氏は、退職にあたってまとめた資料の筆頭に、「森村市左衛門翁研究の導入資料」を載せており、この教育活動を重視していたことがうかがえる。この資料によると、創立者の業績についての学びは、導入段階では時代背景や人物伝の研究が中心となっている。日本語学による語彙研究手法を加えることは、建学の精神や校訓との比較も可能となり、発展的な学習段階に

---

[2] 専修大学「21世紀ビジョン」https://www.senshu-u.ac.jp/about/spirit/vision.html（2022年６月28日閲覧）

[3] 森村学園中等部・高等部「最近の森村　2019.09.13　中等部１年　創立者森村市左衛門研究」https：//www.morimura.ac.jp/jsh/morimura/2019/09/123/（2022年６月28日閲覧）

おける教材開発に貢献できる可能性をもっている。

2．語彙調査の対象―森村市左衛門―

本稿の事例紹介でとりあげる森村市左衛門（1839-1919）は、明治期の実業家であり、晩年に学校を創立した人物である。

市左衛門の生涯については、砂川（1998）、大森（2008）に詳しいが、以下では、本稿の理解に必要な範囲の略歴について、若宮（1929）及び公益財団法人 森村豊明会のwebページ[4]を参考にしながら紹介する。

森村市左衛門は、天保10（1839）年、江戸京橋の武具商の家に生まれた。生家は、安政２（1855）年の大地震で家屋財産等全てを失い、市左衛門は露天商を営むなどして家族を養うことになった。

安政６（1859）年の横浜開港を契機に、外国人居留地で仕入れた洋服や雑貨を売り歩くなかで、中津藩の福澤諭吉の知遇を得る。そして、市左衛門は、福澤の思想に深く感銘を受け、国の経済を救うための貿易の重要性に気付く。明治10（1877）年前後に、森村組及び森村ブラザーズ（ニューヨーク）を開設し、陶器を中心とした対米貿易を開始。苦難を乗り越えながらも成功を収め、森村財閥を築くに至った。また、第一生命、富士紡績等の設立にも参画している。

明治15（1882）、日本銀行創立とともにその監事に任命されたことからも、当時の政財界からの評価の高さがうかがえる。

また、無一文の中から立ち上がり、対米貿易の数々の障壁を乗り越え、共に事業を支えてきた弟や息子を失ってもなお奮闘する姿は、立志伝として取り上げられた。例えば、明治45（1912）に刊行された田邊備山『立身修養 現代名士伝』（修文館）では、乃木希典、吉田東伍、大隈重信、渋沢栄一、後藤新平、安田善次郎、斎藤実、村井吉兵衛と並んで取り扱われており、明治期の立志伝の代表格の一人でもあった。また、本人の了解を得ないまま森村市左衛門述と称した書物[5]も出回っている。

---

[4] 公益財団法人 森村豊明会「財団概要」https：//morimura-houmeikai.jp/about/（2022年６月28日閲覧）

明治34（1901）年に社会貢献の団体である森村豊明会（現在の公益財団法人森村豊明会）を設立し、日本女子大学、慶應義塾、早稲田大学、北里研究所など、教育・研究分野に対する支援も行なった。日本女子大学付属の施設が豊明幼稚園・豊明小学校と称されるのはこの名残である。特に教育に高い関心を示し、明治43（1910）年に自らの邸内に私立南高輪幼稚園、私立南高輪尋常小学校（現在の学校法人 森村学園）を開設した。

また、森村市左衛門は、田尻稲次郎が初代団長を務めた社会教育団体「修養団」（1906年結成）の有力な後援者でもあった。

3．森村市左衛門著述資料の選定とテキストファイル化

今回取り上げる森村市左衛門が創立した森村学園の建学の精神は「独立自営」、校訓は「正直・親切・勤勉」である。

これらの語は、市左衛門の著述の中に頻出する言葉であるのかというのが、本稿での問いかけである。市左衛門の著述を収める書物としては次のものが知られている。

（1）森村豊明会/編集（1906）『㊙の礎』、森村豊明会

明治37～38（1904～1905）年に、日本陶器合名会社（森村組によって設立）の社員に向けて行われた講演を文字化したもの。市左衛門の講演３編、市左衛門を含む対談１編が収められているが、文字数が少ない。現在入手しやすいのは1996年に刊行された新訂版。

（2）森村市左衛門/著（1912）『独立自営』、実業之日本社

市左衛門が自らの「人間処世の根本主義」を述べたもので、立志伝や経営哲学を中心に構成されている。明治経営名著集完全復刻版の１冊として、複製版が1978年にダイヤモンド社から刊行されている。複製版の原資料（1912年版）は、奥付上、自著としているが、口述筆記で

---

[5] 森村（1912）『独立自営』の序文では、当人が与り知らない『積富の実験』が出版されていることにふれている。また、稿者の手元の森村市左衛門/述、偉人言行研究会/編『奮闘と幸福』（内外出版協会、1919年）は、市左衛門が出した『独立自営』とも内容が異なり、出典がよくわからない著述をかき集めた便乗商法ともとれる書物である。

ある可能性が高い。文字数が多く、まとまった語彙研究資料として有用である。

（３）森村市左衛門/著、森村豊明会/編集（1999）『儲けんと思わば天に貸せ』、社会思想社

雑誌『時事評論』、『実業之世界』、『実業之日本』等に掲載された「森村市左衛門」名義の記事（記者による口述筆記）の中から45編をセレクションし、表記等を現代に読みやすい形に変えた上で掲載している。

いずれも、市左衛門の口述を他者が文章化したものであり、自ら記した文章ではない。したがって、使用語彙を調査するための資料としては扱いに注意が必要となる。文末表現、助詞、接続詞などの使用は、文字化した記者などの使用語彙の影響を受けている可能性が排除できない。

本稿では、（３）の原資料となった『実業之世界』、『実業之日本』に発表された記事を調査対象にした。（２）も相当の文字数を収めていて、有用ではあるが、（３）は同様に文字数が多いだけでなく、〈発表時期がある程度の長期間にわたっている〉、〈時事問題など話題が多岐にわたる〉という点に着目した。

本稿で紹介する語彙調査の目的は、建学の精神や校訓と比較するためであるので、名詞が調査対象となる。名詞の使用は記事の内容（話題）に結び付きが強い。したがって、文字化の際に他者の手が入った文章であっても、市左衛門が話した内容から大きくそれた名詞使用となる可能性は低いと考えた。

４．名詞語彙の分析から何を知りたいか

今回の調査では、国立国会図書館のマイクロフィルムに拠って記事を収集した。蓄積したテキストデータは、『実業之日本』89編（233,748字）、『実業之世界』21編（37,678字）の合計110編分（271,426字）となった。

本稿における分析では、テキストデータを構築した２誌のうちで文字数が多い『実業之日本』の89編（233,748字）を主たる調査対象とする。文字数の少ない『実業之世界』については、参考として比較するために用いることにする。

以下、語彙調査によって調べたい事項について整理しておく。

〔調査１〕掲載時期による名詞語彙の違い

『実業之日本』における「森村市左衛門」名義の記事は、明治32（1899）年から大正７年（1918）までの20年間にわたって不定期に掲載されている。これを２期に分割して比較することで、名詞語彙に変化が見られるのかを調べてみることにする。

２期への分割は、若宮（1929）掲載の年譜で学園設置の決心をしたとされる明治41（1909）年に注目し、以下のようにした。

◇第１期

『実業之日本』掲載の「森村市左衛門」名義の記事のうち、明治32（1899）年から明治40（1908）年までの10年間（37編、106,446字）

◇第２期

『実業之日本』掲載の「森村市左衛門」名義の記事のうち、明治41（1909）年から大正７（1918）年までの10年間（52編、127,302字）

〔調査２〕セレクションの有無による名詞語彙の違い

前述のように、『儲けんと思わば天に貸せ』（以下、社会思想社版と称する）に再掲載された45編は、『時事評論』、『実業之世界』、『実業之日本』に掲載された「森村市左衛門」名義の記事の中から、セレクションされたものである。セレクションの基準は明記されていないが、1999年時点において森村豊明会あるいは森村グループが期待する市左衛門像と大きな乖離のない記事が選ばれていると考えるのが穏当であろう。

そこで、『実業之日本』に掲載された「森村市左衛門」名義の記事を対象として、セレクションされていない場合の名詞語彙と、セレクションされた場合の名詞語彙が一致しているのか、それとも違いが見られるのかについて調べてみることにする。ここで比較を行なうデータは次の二つである。

◇セレクションされていない場合（全期間（第１期と第２期））

『実業之日本』掲載の「森村市左衛門」名義の全記事89編（233,748字）

◇セレクションされた場合

『実業の日本』掲載の「森村市左衛門」名義の記事のうち社会思想社版に

も掲載された22編（60,023文字）

〔調査３〕雑誌の異なりによる名詞語彙の違い

『実業之日本』のほかに『実業之世界』への掲載記事もデータ化している。20年間にわたって網羅的に89編を収集できた『実業之日本』に比べ、『実業之世界』における「森村市左衛門」名義の記事は８年間（明治41（1908）年から大正４年（1915）まで）で、データ量が少ない。しかし、時期が重なる『実業之日本』第２期との比較を行なうことによって、掲載雑誌によって名詞語彙に違いが見られるのかについて調べてみることにする。比較を行なうデータは次の二つである。

◇『実業之日本』第２期

『実業の日本』掲載の「森村市左衛門」名義の記事のうち、明治41（1909）年から大正７（1918）年までの10年間（52編、127,302字）

◇『実業之世界』

『実業之世界』掲載の「森村市左衛門」名義の記事（明治41（1908）年から大正４（1915）年までの８年間）21編（37,678字）

５．分析と集計の手順

〔調査１〕〔調査２〕〔調査３〕に共通して、次の手順で分析・集計を行なった。

５．１．テキストを準備する

準備作業として分析対象になる本文のデータを準備する。本文のデータは、調査目的に応じて、複数の条件によって記事を取捨選択しやすいようにExcelファイルに整理した。

Excelファイルでは［本文］の列を設け１セルに１文を入力した。そして、各文について、［掲載雑誌名］、［記事タイトル］、［掲載年月日］、［社会思想社版への再掲載の有無］を示す列を付加した。［本文］の列に記事タイトルや見出しも入力しているので、本文とそれ以外とを峻別するための［本文種別］列も付加した。

こうした列を設けておき、フィルター機能を使用することで、条件に応じた本文データを抽出することが可能となる。例えば、「本文かつ『実業之日本』掲載かつ第１期分」といった条件のデータを抽出したり、「本文かつ『実業之日本』掲載かつ社会思想社版非掲載記事」といった条件のデータを抽出したりすることが容易となる。

条件を設定して選び出した本文データは、次の形態素解析の作業が行ないやすいようにテキスト形式のファイルとして保存しておく。

５．２．形態素解析を行なう

本文データの中から名詞を抽出するための作業として、形態素解析を行なう。形態素解析は、中等教育の国語科で取り扱う品詞分解に近いことをPCで行なう作業である。

この作業には、国立国語研究所が形態素解析器としてweb上で提供している「web茶まめ」[6]を使用した。

「web茶まめ」の画面では、〈解析前処理〉、〈辞書選択〉、〈出力項目〉、〈出力形式〉の選択を行える。

〈解析前処理〉では、解析に不向きな情報を取り去ったり、文字等を解析しやすいものに変換したりできる。今回のデータは形態素解析を行なうことを前提に作成したものなので、この項目は使用しなかった。

〈辞書選択〉では、形態素解析を行なう際に照合する辞書が複数用意されており、解析対象の本文の文体に応じて二つまでの使用を選択できる。今回は、「近代文語UniDic」の辞書だけを指定した。

〈出力項目〉では、形態素解析結果のファイルに出力する項目を取捨選択できる。今回は、デフォルトのままとして、項目の加除は行なわなかった。

〈出力形式〉も複数用意されている。今回は、事後の集計が行ないやすいようにExcelファイルで出力するように設定した。なお、「web茶まめ」では、一度に処理できるデータの大きさが限定されており、「Excel形式でダウンロード

---

[6] 国立国語研究所「web茶まめ」https：//chamame.ninjal.ac.jp/

する場合、テキストデータの容量は１ファイル100KBまで」となっている。そこで、テキストデータのファイルサイズが100KBを超える場合は複数のファイルに分割した上で形態素解析を行ない、出力結果のExcelファイルを結合させる作業が必要である。

なお、上記で取得した自動解析結果は高精度ではあるが、完璧とは言えない。そのため、言語研究を目的としている場合は、解析ミスの修正は必須である。しかし、ここでは修正作業を省略することにした。本稿では、日本語学の専門知識をもたない中等教育現場の教員が手軽に行えることを旨としているからである。

「web茶まめ」が形態素解析で参照する各種辞書（UniDic）は、「短単位」という言語単位を用いている。この章の始めで、形態素解析は品詞分解に近いと説明したが、短単位は学校文法の単語とは異なるルールで規定されている。解析結果を適切に修正するためには、短単位についての知識が要求される。中途半端な修正は、解析結果を歪めることになり、再現性を欠いた分析結果を生み出すことになってしまうので避けたい。

５．３．集計を行なう

（１）集計用シートの準備

Excel形式でダウンロードした解析結果を用いて、語彙を集計するための集計項目を作成する。新たな集計用のシートを作成し、「解析結果」のシートから［語彙素］、［語彙素読み］、［品詞］の３列をコピーする。UNIQUE関数を用いて、［語彙素］、［語彙素読み］、［品詞］の３列が揃って同じものを１種類の語として単一化した。

（２）頻度情報の取得

［頻度］の列を付加し、COUNTIFS関数を用いて、集計項目ごとに頻度を数える。COUNTIFS関数では、［語彙素］、［語彙素読み］、［品詞］の３列が揃って同じものを数える設定にした。

（３）頻度順へのソート

集計項目ごとの頻度を得ることができたら、頻度順にソートする。後の分

析では、頻出語の情報が必要になるので、ソートは降順（数値が大きい順）で行なった。

（4）名詞の選択

さらに、ソート済みのデータの［品詞］列に対して、フィルター機能を利用して「名詞-普通名詞」となっているデータのみを抽出した。名詞であっても「固有名詞」、「数詞」、「助動詞語幹」は対象外とした。

（5）順位情報の取得

名詞の抽出を終えたら、別シートを作ってそこにデータをコピーする。これで、「名詞が頻度降順に並んだ表」ができたことになる。この表に［順位］の列を設け、RANK関数を用いて順位の情報を取得する。

（6）累積度数の算出

（5）の作業に続いて、表に［累積頻度］及び［累積度数］の列を設ける。［累積頻度］は、降順に並んだ頻度を累積していくもので、表の末尾のデータは名詞の頻度数の合計と同じ数字になる。

［累積度数］は、名詞の合計頻度を分母、各累積頻度を分子として百分率で表示している。その語が名詞全体の何％の集団に含まれるかという上位率を知ることができる。母数の異なる二つの表を比較する場合、順位や頻度では比較しにくいが、累積度数によって、客観的な比較が容易になる。

6．考察

6．1．〔調査1〕掲載時期による名詞語彙の違いについて

明治32（1899）年から大正7年（1918）までの20年間にわたって『実業之日本』に不定期に掲載された「森村市左衛門」名義の記事の名詞語彙について、学園設置の決心をしたとされる年を境に第1期と第2期に分割して比較した。

第1期、第2期ともに、使用頻度の高い名詞は共通していて、「事」、「物」、「所」、「為」、「人」、「者」などである。こうした傾向は、一般的に日本語の文章に観察できることである。

それらを除くと、第1期は「事業（3位）、財界（8位）、実業（10位）、国民（11位）、教育（15位）、精神（17位）、貿易（20位）、発達（22位）、海外（23

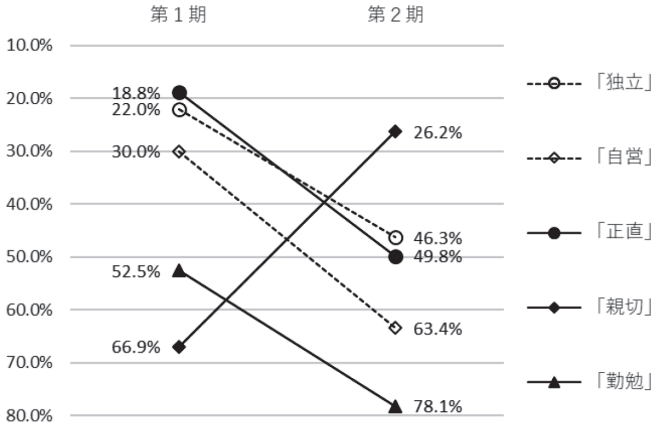

図１　第１期と第２期の比較
（建学の精神・校訓にも使用される語）

位）、信用（24位）」が上位10語に当たる。第２期は「青年（９位）、事業（10位）、精神（11位）、金（11位）、仕事（15位）、国家（17位）、教育（18位）、国民（18位）、学校（20位）、世界（20位）」が上位10語に当たる。

さて、建学の精神にある「独立」「自営」、校訓にある「正直」「親切」「勤勉」について、第１期と第２期を比較したのが図１である。表で用いた数値は累積度数で、数値が低いほどその語の頻度が高いということになる。

「独立」「自営」についてみると、第１期では高頻度であるが、第２期では頻度は下がる。なお、第１期、第２期ともに、「独立」の方が「自営」よりも頻度が高い。

「正直」「親切」「勤勉」については、「正直」の頻度が第１期で高い。「親切」の頻度は、第１期で累積度数66.9％と頻度が低かったが、第２期に累積度数が26.2％となり頻度が高くなっている。「勤勉」は、累積度数が第１期52.5％、第２期78.1％で、２期ともに頻度は低い方である。

６．２．〔調査２〕セレクションの有無による名詞語彙の違いについて

『実業之日本』に掲載された「森村市左衛門」名義の記事について、第１期

と第２期を合わせた全期と、社会思想社版で記事をセレクションした場合とについて、名詞語彙を比較した。

建学の精神にある「独立」「自営」、校訓にある「正直」「親切」「勤勉」について比較したのが図２で、図１と同じく数値は累積度数である。

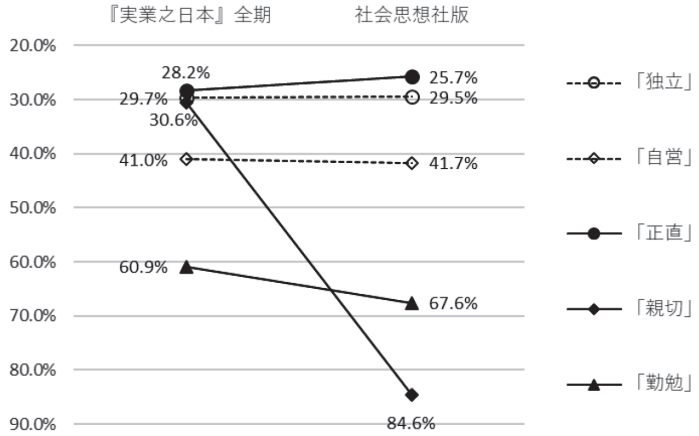

図２　セレクションがない場合とある場合の比較
（建学の精神・校訓にも使用される語）

「独立」「自営」「正直」「勤勉」については、『実業之日本』全期の場合もセレクションされた社会思想社版も、ほぼ似通った累積度数になっている。

「親切」は、社会思想社版では頻度１（累積度数84.6％）になっているが、セレクションが行われると、語彙構成に歪みが出るのは当然のことである。それでも、社会思想社版は、「独立」「自営」「正直」「勤勉」の頻度については、結果としてほどよい縮図を構成していることが分かる。

６．３．〔調査３〕雑誌の異なりによる名詞語彙の違いについて

雑誌が違う場合に使用される名詞語彙に変化が生じるのかを知るために、『実業之日本』第２期と『実業之世界』（ともに明治41（1909）年以降の記事）とを比較した。

建学の精神にある「独立」「自営」、校訓にある「正直」「親切」「勤勉」について比較したのが図３で、やはり累積度数を比較している。

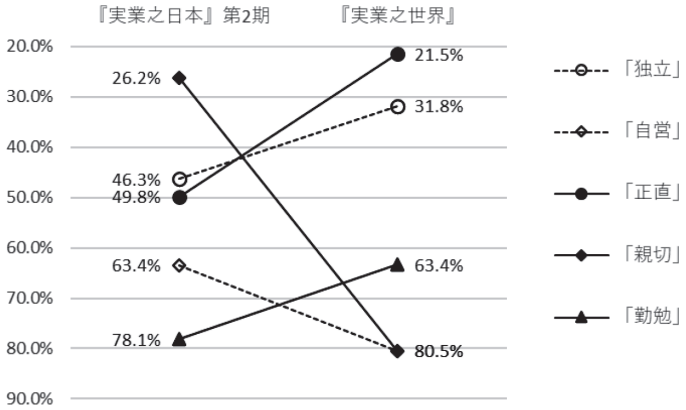

図３　雑誌の違いによる比較（建学の精神・校訓にも使用される語）

『実業之日本』第２期において、「親切」は５語の中で最も使用頻度の高い語であったが、『実業之世界』では用例１（累積度数80.5％）となっている。また。「自営」についても大きく頻度を下げている。

一方で、「独立」「正直」「親切」は頻度が高まっている。

この比較から、建学の精神にある「独立」「自営」、校訓にある「正直」「親切」「勤勉」に限定してみると、『実業之世界』は『実業之日本』よりも話題が「独立」「正直」に限定されることが予測できる。

７．市左衛門の使用語彙と校訓との関係

森村学園の校訓における「正直、親切、勤勉」の並び順は、創立者の使用頻度を反映していると見ることもできる。

「森村市左衛門」名義の記事では、「正直」は、今回比較したいずれの角度から見ても頻度が高い語であった。「親切」は、『実業之日本』第２期になると頻度が高くなる。「勤勉」は、２期とも頻度が高いとは言えなかった。

市左衛門が学校を設置した明治43（1910）年以降に、「正直」以外に「親切」を使うことが増えたことは、『実業之日本』の第１期と第２期との比較から明らかである。

「勤勉」は、いずれの角度から見ても、頻度が高い語とは言えない。むしろ、

前向きな生き方を意味する名詞としては「奮闘」の方の頻度が高い。表１は、「勤勉」と「奮闘」とについて比較したものであるが、いずれの集計でも「勤勉」よりも「奮闘」の頻度が高くなっている。

表１　「勤勉」と「奮闘」の比較

	「勤勉」			「奮闘」		
	順位	頻度	累積度数	順位	頻度	累積度数
『実業之日本』全期	504	13	60.9%	48	81	25.7%
『実業之日本』第１期	321	10	52.5%	105	24	33.9%
『実業之日本』第２期	959	3	78.1%	38	57	27.1%
社会思想社版	522	3	67.6%	34	32	24.8%
『実業之世界』	291	3	63.4%	141	6	53.7%

「奮闘」という語は、森村（1912）『独立自営』の目次にも頻出している。偉人現行研究会が編んだ市左衛門の言行録が『奮闘と幸福』（内外出版協会、1919年）と名付けられたように、「奮闘」は「独立自営」と並んで世間での市左衛門の〈代名詞〉であった。

では、「奮闘」が校訓に用いられなかった理由は何であろうか。想像するしかないが、「奮闘」は実業の場面では用いても校訓としては座りが悪いように思われる。

「勤勉」は、出現頻度は低いといっても、市左衛門の「使用語彙」の中に含まれていた語だということはデータから読み取ることができる。これも想像でしかないが、「奮闘」に代わる学校にふさわしい語を選んだ結果が「勤勉」ではないだろうか。

８．おわりに

本稿では、日本語学が他分野に応用可能な学問であることを紹介することを目的として、学校創立者の使用語彙と校訓等の語彙との比較の実例を紹介した。

明治期に活躍した実業家・森村市左衛門が創立した学校の校訓は、「正直、親切、勤勉」であるが、著述を対象とした語彙調査の結果、「正直」、「親切」

については、《創立者が高頻度で用いていた語と合致すること》が分かった。「勤勉」については、著述での使用頻度は高くなく、《創立者が使用語彙の中から学校にふさわしい語を選んだ》ということを推測させられる結果となった。

参考文献

江川昭夫（2021）「未来志向型教育とNew Normal Educationを目指す学校組織戦略的マネジメント―未来に生き残る学校改革―」『私学経営』No.562、pp.44-74、私学経営研究会、2021年12月

大森一宏（2008）『森村市左衛門―通商立国日本の担い手―』（評伝・日本の経済思想８）、日本経済評論社、2008年

砂川幸雄（1998）『森村市左衛門の無欲の生涯』、思草社、1998年

田邊備山『立身修養 現代名士伝』、修文館、1912年

花村哲男（2022）「この山道を行きし人あり」『研究紀要』創刊号、pp.3-11、森村学園中等部・高等部、2022年３月

町田 健一（2003）「私立学校における建学の精神と教師教育―養成、採用、研修を通して―」『日本教師教育学会年報』12巻、pp.44-49、日本教師教育学会、2003年

森村市左衛門/述、偉人言行研究会/編『奮闘と幸福』、内外出版協会、1919年

若宮卯之助（1929）『森村翁言行録』、森村豊明会、1929年（ただし、改訂版（1969年）に基づいた）

附表

図１～図３の元データを以下に掲載する。

付表１　第１期と第２期の比較（図１に関連）

『実業之日本』第１期				『実業之日本』第２期			
語	順位	頻度	累積度数	語	順位	頻度	累積度数
「正直」	29	52	18.8%	「親切」	36	59	26.2%
「独立」	41	45	22.0%	「独立」	150	21	46.3%
「自営」	79	29	30.0%	「正直」	186	17	49.8%
「勤勉」	321	10	52.5%	「自営」	415	8	63.4%
「親切」	665	5	66.9%	「勤勉」	959	3	78.1%

付表２　セレクションがない場合とある場合の比較（図２に関連）

『実業之日本』全期				社会思想社版			
語	順位	頻度	累積度数	語	順位	頻度	累積度数
「正直」	61	69	28.2%	「正直」	37	29	25.7%
「独立」	69	66	29.7%	「独立」	50	25	29.5%
「親切」	74	64	30.6%	「自営」	118	12	41.7%
「自営」	154	37	41.0%	「勤勉」	522	3	67.6%
「勤勉」	504	13	60.9%	「親切」	1211	1	84.6%

付表３　雑誌の違いによる比較（図３に関連）

『実業之日本』第２期				『実業之世界』			
語	順位	頻度	累積度数	語	順位	頻度	累積度数
「親切」	36	59	26.2%	「正直」	16	27	21.5%
「独立」	150	21	46.3%	「独立」	45	13	31.8%
「正直」	186	17	49.8%	「勤勉」	291	3	63.4%
「自営」	415	8	63.4%	「親切」	678	1	80.5%
「勤勉」	959	3	78.1%	「自営」	678	1	80.5%